

# 物語の語り手を批評するための国語科教材研究の一観点

——「語りを疑う読み」をめぐる——

幾田伸司

(キーワード：語りを疑う読み, 批評, 物語テキスト, 教材研究, 「少年の日の思い出」)

## 1. はじめに

物語テキストは、語り手が語った言葉を、読者が読む（聞く）ことで成立する。このとき、読者は基本的には語り手が語る言葉を信頼している。読者にとって、物語の中で起きる出来事を知るための情報源は語り手の言葉だけであり、語り手が提示する情報を信じなければ、読者は物語世界を作りあげることができない。もちろん、読者は物語が作り事であり、語られている出来事が事実ではないことは知っている。しかし、少なくとも読者は、語り手は物語世界内のことについて知っていることは誠意を持って語っていることを前提にして読んでおり、その語りが虚偽であるとは思っていない。語られた言葉を信頼することは、物語を読むための大前提である。

一方で、読者は語り手の言葉をすべて信じているわけではない。当然であるが、語り手が出来事の細部すべてを語ることはできないのであり、意図的にせよ無意識にせよ、何を語るか、どのように語るかといった何らかの選択を行って出来事を読者に提示することになる。その意味で、語り手は語り手の認識を通して作られた虚構であることもまた、物語テキストの基礎をなす認識である。そうした中で、読者は語りの言葉を時には疑い、その信憑性についての判断をくり返ししながら自らの読みを作っていく。

では、語りの言葉を信頼しない読みはどこまで許容されるのだろうか。語り手や語り手を疑うことを許容すれば、読者が語りの言葉の中から自分に都合のよい部分だけを取り出して解釈するような恣意的な読みになりやすいという危険はあるだろう。しかし、ある程度物語世界に参加しながら、なお語り手の主観に巻き込まれない読みを形成できるのであれば、それは物語の語り手を批評することと言い換えることができる。そしてそれは、読むことの学習において培いたい力であるように思われる。語り手や語り手を疑う読みは、どのような読みであれば恣意的にならず、他者からの承認を得られやすいのだろうか。

こうした語り手の言葉を信頼するかどうかについての判断は、当然、読者の解釈に影響を与える。特に語り手が物語世界内に登場する一人称の物語においては、語り手の信頼度に対する評価は読者が描く語り手の人物像に直結し、物語の読み全体にかかわる。したがって、語り手の信頼度に応じた読みの違いを検討することは、学習者の多様な読みを予想することが求められる教材研究においても、有効な観点の一つとなると考えられる。

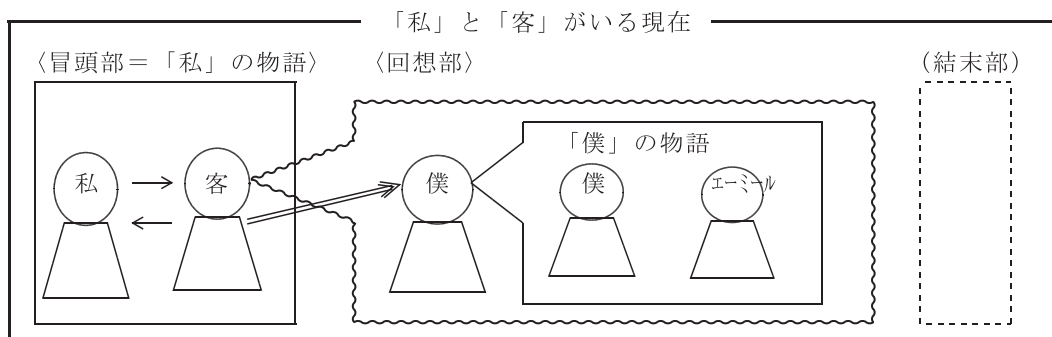
以上の問題意識より、本稿では語り手の言葉を信用しない解釈の可能性を、具体的な物語テキストに即して考察する。事例として、「少年の日の思い出」（ヘルマン・ヘッセ、中1）におけるエーミールに対する「僕」の認識についての語りを検討する。具体的には、子供の頃の「僕」は本当にエーミールをにくんでいたのか、つまり「僕は、ねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた。」という「僕」の語りを信頼しない解釈は可能なかという点である。

## 2. 「少年の日の思い出」の語り構造

「少年の日の思い出」は戦後最初期から採録され続けてきた安定教材であり、現行ではすべての教科書で採録されている（ただし、三省堂は別冊資料編での採録）。教材解釈や実践も多く、教材としての意義と課題については、すでに浜本純逸（1983）、菅原稔（1987）、三浦和尚（2010）などで論じられている。また、近年、このテキストについては語り手をめぐっての考察が深められており、語りについての議論の俎上に載せられることが多い素材でもある。

「少年の日の思い出」は、「私」「僕」と名乗る二人の語り手によって語られた、二部構成のテキストととらえられてきた。〈冒頭部〉の語り手は「私」であり、〈回想部〉の語り手は「僕」（＝冒頭部における「客」）である。

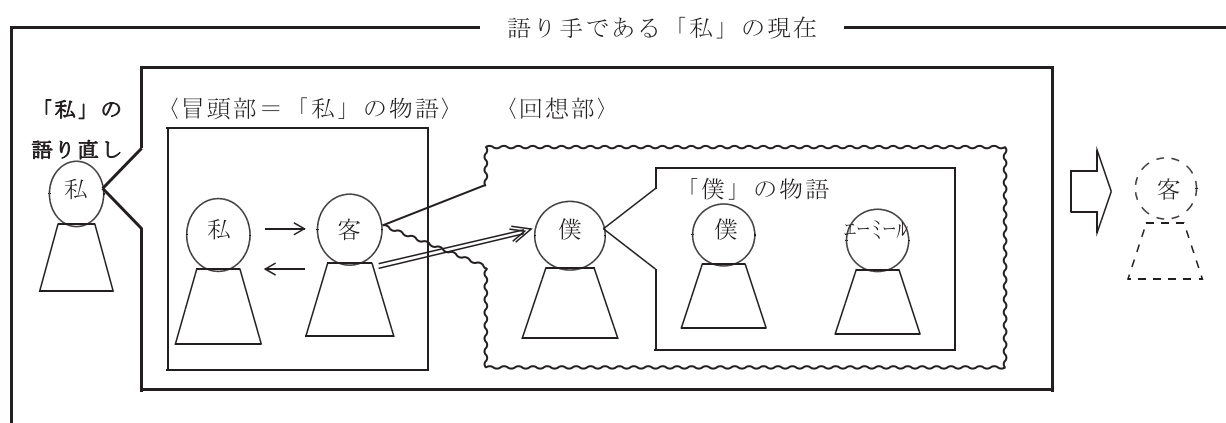
〈冒頭部〉と〈回想部〉は異なる語り手が語りの責任を担っており、〈冒頭部〉の語りには「私」の認識が、〈回想部〉の語りには「僕＝客」の認識が反映されている。また、このとき、〈冒頭部〉に対応する結末部（＝「私－客」場面に返っての語り手「私」による総括）は物語内に書かれておらず、そのためこの物語は結末部を欠く不完全な額縁構造であると考えられてきた（【図1】）。



【図1】

「少年の日の思い出」の教材としての特質について、三浦（2010）は、浜本（1983）、菅原（1987）をふまえて『「人間存在の本質」という側面と、『同世代としての共感』という側面を併せ持つ点で、高い評価を受けている。しかし同時にこの作品は、『思い出』という『額縁構造』を持つ（額縁小説）ことにより、大人の物語としても成立している」とまとめている（三浦（2010），p. 26）。「人間存在の本質」「同世代としての共感」は、「僕」の少年時代に起こった出来事を学習者がどう価値付けるかという点にこのテキストの教材としての意義を見いだし、  
「僕」の語りを信頼した上で、語られた少年時の「僕」の内面に焦点化する教材解釈であると言えよう。それと同時に三浦は、〈冒頭部〉で過去の物語を語る大人の「僕＝客」の認識も視野に入れ、大人になった「客」が過去の過ちの思い出にどう向き合ったかという点にも、このテキストの教材価値を見いだしている。

これに対して、竹内常一（2001）は、〈回想部〉は「僕＝客」が語った言葉を「私」が語り直した物語であるとし、〈回想部〉を含むテキスト全体が語り手「私」によって統括された物語であるととらえた（【図2】）。そして、「かれにたいする応答がこの小説のなかに織りこまれているのだから、この小説は結末部を必要としない」、「それでもこの小説に後話が必要だというのであれば、それはかれの話聞いたわたしの感想ではなく、わたしの書いた物語にたいするかれの感想でなければならない」とした（竹内（2001），p. 219）。



【図2】

竹内の枠組みによれば、「少年の日の思い出」は、〈少年時代の「僕」の物語を語った「客」の回想〉を「私」のフィルターを通して提示するという、三人の語り手の認識を通した物語だということになる。少年の「僕」の内面や起こった出来事は大人になった「僕」（＝「客」）の語りを通してしか示されず、大人の「客」の語りも「私」の言葉としてしか示されない。そのため、読者は「僕」「客」の言葉を元のままの形で知ることはできない。読者は、「私」という語り手を意識しないまま、「私」によって語られた物語の中に「僕」「客」の痕跡を見出しな

がら、それを読むことになるのである。

このように〈回想部〉の語り手も「私」であることとらえることで、「少年の日の思い出」は、罪に対する罰とは何か、自らの過ちによって美を損なうことの痛みをどう引き受けるか、あるいは過去に犯した過ちに人はどう向き合うかといった、道徳的、教養主義的な意義づけにとどまらない、読みの可能性が示された。自分の過ちとの向き合い方にせよ、あるいはその過ちを語るの意味にせよ、それは少年時、または大人になった「僕」の内面の葛藤であり、「僕」のモノローグにすぎない。「僕」の物語を「私」がどう受け取めたかを問うことで、「少年の日の思い出」というテキストは、他者の痛みを人はをどう受け止めるのかという、社会的問題に開かれることになる。そのうえで竹内は、「僕」の物語に対する「私」の応答は「私」が語り直した物語そのものであるととらえ、「私」という他者を介して可視化された自らの物語を「客」がどう受け止めるかという点に、この物語の結末部を考えている。「僕」が語った一つの物語をめぐって「私」「客」それぞれの応答を問い、「僕」のモノローグを「僕」と「私」との対話として捉え直したのが、「私」語り手説であった。

一方、「私」を語り手とすることで、次のような問題が生じることになる。読者は〈回想部〉における「僕」についての記述を、だれの認識が投影されたものとして読むべきか。〈回想部〉における「私」の認識を読者はどのようにして理解するのか。「客」の語った言葉を「私」がどのように語り直したかわからない以上、読者は「私」が「客」の回想をどうとらえたかを判断できない。竹内自身、「わたしはそれを筋の通ったものにし、その陰影をきわだたせ、その主題を明確にしようとしたにちがいない。」(竹内(2001), p. 219)としており、「私」の役割は主題の明確化にとどめ、〈回想部〉の語り手に投影されているのは「客」の認識であるとして論を進めている。つまり、「僕」に対する「私」の批評性は、「僕」の語り手を語り直すという「私」の言語行為について考えるしかないのである。その結果、語り手を「私」ととらえたとしても、〈回想部〉の解釈ははまだ「僕」の物語を読むことにとどまってしまうという批判もある(須貝(2012))。

須貝の批判はもっともではあるが、〈回想部〉の語りは「私」と「客」が一体化しており、「私」の認識を投影させた「語り直し」がどのように「客」の元の語りを変容させたかを判断することはできない。また、教材として考えれば、〈回想部〉で課題となるのは「僕」の物語を学習者がどう意味づけるかであって、その際に「私」と「客」の認識の違いを読み分ける必然性はない。したがって、〈回想部〉の語りには「客」(=大人の「僕」)の認識が投影され、それを語り直す言語行為に「客」に対する「私」の批評性があることとらえる読みが、教材分析に際してはもっとも生産的であろう。

「私」を語り手とするとき、それによって「客」が語る「僕」の物語についての読みがどう変容するかという点も、検討が必要な課題である。この点については、松本修(2005)が、読者が想定する語り手の違いが「僕」の犯した罪を「盗み」とみなすか「美の冒流」とみなすかの違いに対応していると整理している。

竹内は「わたし」による許しを読み取ることができるものとしている。これは、「僕」の回想物語をも「わたし」による「聞き書き」として、再話者としての「わたし」を想定する語りの構造の把握と密接に関連している。少年時の「僕」にのみ物語の語りが帰せられれば、エーミールとの関係は「僕」から提示された一方的なものであり、その限定的な認識は相対化され批判にさらされるかもしれないが、語りが大人の「僕」や聞き手そして全体の語り手である「わたし」に帰せられれば、すでに何らかの相対化が行われ、その上でエーミールとの関係が提示されているということになるからである。

たとえば、「僕」の犯した罪を「盗み」とみなすか、「美の冒流」とみなすかということについて言えば、少年時の「僕」の立場からすれば、盗みとしての意味合いが強いかもしれないが(実際に母親の視点が提示されており、母親はもっぱら盗みという罪に着目していると思われる)。一方、大人の「僕」や「わたし」とっては「美への冒流」という側面が強調されて把握されることになるとと思われる。

(松本(2005), pp. 9-10)

松本は、〈回想部〉の少年の「僕」の物語が「客」や「わたし」の認識を通して語られていることを前提として、語られた物語を「事実」として読むのではなく、そのように語った大人の語り手の認識に着目して読むことの必要性を示している。「僕」とエーミールとの関係は、少年の「僕」の偏った認識ではなく、そのように語ることが妥当だと判断した大人の語り手の認識を通して提示された情報である。したがって、批評されるべきは、少年の「僕」ではなくそのように語った語り手だということになる。そのうえで松本は、「僕」の犯した「罪」を「盗み」とみなすか、「美の冒流」とみなすかという読みの違いを、語り手の違いに対応させて説明している。

しかし、ここで指摘された「罪」の意味づけの違いは、語り手の違いというより、この「罪」が子供にとって、あるいは大人にとってどのような意味をもつかについての、「客」「私」の認識の違いとしてとらえるべきであろう。「僕」の犯した罪が少年時代の「僕」や「母親」にとって「盗み」の意味合いが強かったという語りも、「客」「私」の責任のもとになされている以上、「客」「私」の認識の投影と理解すべきである。また、「大人の『僕』や『わたし』にとっては」と併記されているように、このときの「大人の『僕』と「全体の語り手である『わたし』」の違いには言及されていない。松本の議論においては、大人の「客」（または「私」）の語りの中にある「子供の僕」の認識を区別してとらえることの重要性が指摘されており、語り手が「僕」か「私」かの違いがどう読みに影響するかは重視されていないと言えるだろう。

以上、本節では「少年の日の思い出」の語り手についての議論を参照しながら、先行研究で示された教材解釈と語り手との関連について概観した。「少年の日の思い出」全体を「私」の語り直しと捉える語り手理解は、「客」が語った物語をどのように受け止めるかという、テキスト全体についての意味づけにおいては不可欠な視点である。一方で、〈回想部〉の語りについて「私」と「僕=客」を区別することは困難であるし、少なくとも教室においてはその必然性も薄い。そこで本稿では、〈回想部〉については語り手「私」の認識を保留し、「僕=客」の認識として読むこととして、以下の論を進めることとしたい。

### 3. 「僕」はエーミールをにくんでいたのか

#### 3.1 「僕」のにくしみについての把握

〈回想部〉の「僕」の語りには大人の「客」と子供の「僕」の認識が混じりあっており、それが解釈の分かれを呼ぶ可能性をもっている。「僕=客」が提示する少年の時の「僕」の心情、たとえば「一度起きたことは、もう償いのできないものだということ」という自己の行為に対する認識について語られた言葉を信頼しないことで、「僕」の行動が「美への冒涇」という側面を持つという読みの可能性が生じるのである。これは、語りを疑う読みが別の読みを開く可能性を示唆している。

そこで本節では、「僕」はエーミールをどう思っていたのかについて語りを検討し、語りの言葉を疑う読みがどのような読みであれば他者に受け入れられるのかを検討する。

「少年の日の思い出」において、「僕」はエーミールについて次のように語り始めている。

あるとき、僕は、僕らのところでは珍しい、青いコムラサキを捕らえた。それを展翅し、乾いたときに、得意のあまり、せめて隣の子供にだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。それは子供としては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、こざれいなのと、手入れの正確な点で、一つの宝石のようなものになっていた。彼は、そのうえ、傷んだり壊れたりしたちょうの羽を、にかわで継ぎ合わすという、非常に難しい、珍しい技術を心得ていた。とにかく、あらゆる点で模範少年だった。そのため、僕は、ねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた。

この一連の語りには、「エーミール」という固有名詞は登場しない。「隣の子供」「先生の息子」「この少年」「彼」といった言葉でしかエーミールのことを呼ばない語りには、エーミールに触れるのを避けようとする「僕」の内面が投影されているようにも見える。エーミールのことには触れたいが、語らなければならないという矛盾した状況の中で、「僕は、ねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた。」という内面が吐露されるのである。この語りは、嘆賞と憎しみというエーミールに対する「僕」の矛盾した思いの表出ととらえられ、「僕」とエーミールの関係を読み解くための起点として参照されてきた。現行教科書の指導書においても、「僕は、ねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた」という記述については次のような解説が付されている。

賞賛と憎悪という背反した思いが述べられている。前述の「非のうちどころがないという悪徳」とともに、「ほく」のエーミールに対する二律背反的な感情表現となっている。（教育出版）

「僕」にとってエーミールが一つの価値の体現者であると同時に、自分とは相容れないものであり、一つの価値の体現ではあるがそこには到達できないという点（妬み・嘆賞）と、その価値そのものが異質だという

点で二重の意味で憎悪の対象となることが示されている。

(学校図書)

近年の論考では、たとえば丹藤(2013)は、エーミールに対する「僕」のコンプレックスと欲望に憎しみの原因を見いだしている。また、佐々木(2012)は、エーミールの人物像の特徴として「バランスの良さ」を指摘し、「激しさのあまりバランスを欠く」「僕」と対照的な少年であることが彼への憎しみを呼び起こしたと分析している。

これらの先行研究では、「僕」がエーミールになぜ憎しみを感じたのかが考察の主眼であり、「ねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた」という語り自体は信頼されている。読者は必ずしも「僕」の語る通りのエーミール像を受け入れるわけではないのだが、「僕」がエーミールを「にくんでいた」ということは疑われないのである。

### 3.2 読者が「僕」の語りを信頼する要件

では、「僕」がエーミールを「にくんでいた」という語りは、なぜ疑われにくいのか。前掲の引用部において、語り手「僕」がエーミールについて読者に提示する情報は、大きく三種類に分けることができる。

- ① エーミールがもつ属性、能力の提示。(「隣の子供」、「先生の息子」、「ちょうの羽を、にかわで継ぎ合わすという、非常に難しい、珍しい技術を心得ていた」など)
- ② エーミールがもつ属性、属性に対する「僕」の評価。(「非の打ちどころがないという悪徳」、「子供としては二倍も気味悪い」など)
- ③ エーミールに対する「僕」の心情。(「ねたみ、嘆賞しながらにくんでいた」など)

①のような、事実として提示されている登場人物の属性や能力の内容を読者が疑うことは、ほとんどない。この種の情報は物語世界の構成そのものにかかわっており、この言表を偽だと判断すれば物語世界自体が作りあげられなくなってしまうからである。もちろん、提示された「事実」が偽である可能性(僕は知らなかったが、エーミールは本当は先生の息子ではなかったという可能性)はあるが、それは語り手もその情報が誤りであることを知らないからそのように語っているのであり、読者は語り手がわざと嘘を述べているとは考えない。物語世界の事実を提供する語りの信頼度は高いと判断される。ただし、事実提示に見える言表にも「非常に難しい、珍しい」という「僕」の認識は織りこまれている。とはいえ「エーミールは、ちょうの羽を、にかわで継ぎ合わすという技術を心得ていた」という事実が受け入れられることで、この技術に対する評価である「エーミールの持っている技術は難しく珍しい」という読みも付随して受容される。

一方、②のタイプの語りの信頼度は低い。特に一人称の場合、読者は、語り手もまた作品世界内を生きる登場人物であり、その人物が作品世界内の他者に対して下す評価は主観的であると考える。そして、その語りは必ずしも信頼できるわけではないととらえるのである。「少年の日の思い出」の場合、「僕」の語りに反して、エーミールに非はなく「僕」が語るエーミール像の方に著しいバイアスがかかっていると見る読みは少なくない。前節で検討した松本の指摘にもあったように、「エーミールとの関係は『僕』から提示された一方的なものであり、その限定的な認識は相対化され批判にさらされる」のである。この批判は、松本が指摘するように、語りにおける大人の「僕」の認識と少年の「僕」の認識とを読者が区別せずにとらえていることが一因にはなっている。ただし、「僕」が提示するエーミール像が大人の「僕」の認識であるととらえたとしても、「僕」の認識が読者から容認されるとは限らない。読者は、①のタイプの語りによって示された情報から個々にエーミール像を作り、自らが作り上げたエーミール像に沿って「僕」が造型するエーミール像を検討する。同様に、事実として提示された「僕」の言動から「僕」の造型を行い、「僕」の語りの信頼度を測っているのである。

それに対して、同じように「僕」の内面についての語りであっても、③のような語り手の主観を述べる語りは、ほとんどの場合、読者から真であると見なされる。「にくんでいた」のような感情や感覚についての記述は、「語り手はそのような心的状態にある」という事実として受け取ることが多いのである。ところが、普段の生活の中で私たちは、他者が自分の主観を語った言葉(「すきだ」「うれしい」など)を、額面通りに受け取ったりはしない。つまり、語り手が自らの主観について語った言葉は、日常世界では真偽判断の基準がないがゆえに信頼されず、物語テキストにおいては真偽の判断基準がないゆえに読者から信頼されやすいと言えよう。

もちろん、語り手が真を語っていると前提するのは、物語テキストを読む際の前提である。とはいえ、日常世界での解釈と同様、語り手が自らの内面について真を語っていない可能性を視野に入れて読むことは、無理な

想定ではないだろう。むしろ、そのような想定をすることで、語り手の主観を相対化するような、異なる解釈が引き出される可能性が生じる。

### 3.3 だれがエーメールをにくんでいたのか

「少年の日の思い出」の回想部では、「十歳ぐらい」と十二歳ぐらいのときの「僕」に起こった出来事が大人になった「僕」によって語られている。複数の年齢の「僕」の認識が重層的に織り込まれ、提示されているのである。では、「僕」がエーメールを「にくんでいた」という語り自体は信頼するとして、この心情はどの年齢の「僕」の感情なのだろうか。これは、松本において指摘されていた、一つの語りに投影されている複数の認識をどう把握するかという課題と重なっている。

「にくんでいた」という記述は、10歳のころの「僕」がエーメールにコムラサキを見せたエピソードとともに語られている。語られた物語ではあるが、この少年期の「僕」の物語を真であるにとらえ信頼する時、解釈は少年の「僕」の内面に向かい、エーメールに対する「にくしみ」は10歳の「僕」の心情であると読まれることになる。「僕」がコムラサキをエーメールに見せた理由はエーメールに対する劣等感の払拭、その裏返しとしてのエーメールの賞賛を勝ち取りたいと欲望などとして意味づけられる。三浦がまとめたような先行研究の多くは、「僕」の「にくしみ」を語られたままに少年期の「僕」の感情として受容し、語りの言葉に準じてエーメール像を形成している。前述の丹藤や佐々木の解釈も、「にくしみ」は10歳の僕の心情であるにとらえている。

ところが、エーメールを「にくんでいた」という感情は、大人になった「僕」が語ったものである。つまり、ここでの「にくんでいた」は、少年のころの感情を大人の「僕」が「にくしみ」という感情に括りこんだものととらえることもできる。少年のころの「僕」はエーメールを嫌いだったかもしれないが、それが「憎しみ」と呼ぶに値する感情だったかはわからない。このような解釈は、「僕」の語りを疑うことによって生じうるのだが、少年の「僕」の言動によっても補強される。たとえば、なぜ「僕」は、にくんでいるエーメールにコムラサキを見せに行ったのか。エーメールに対する「僕」の矛盾する感情の表れとして解釈されたこの言動は、このとき、逆に少年の「僕」がエーメールを「にくんではいなかった」かもしれないことの根拠として解釈されることになる。10歳ぐらいの「僕」にとって、エーメールはまだ、いけ好かないが自分を認めさせたい相手であり、二人の間にはまだ理解し合える可能性が残っているという読みである。語りへの信頼度の違いは、10歳の僕がエーメールに感じていた「にくしみ」の強度のとらえ方の違いとして表れることになる。

このように考えると、なぜ大人の「客」は少年のころの「僕」の感情を憎しみとして語ったのかという問いが生じる。一つの解釈として、エーメールへの「にくしみ」を前景化させることで、少年の「僕」が犯した行為にある程度正当な理由が付与されることが挙げられる。「僕」が犯した、ちょうを盗んだこと、ちょうを壊してしまっただけという「罪」自体は否定しようもないが、そこに「僕」なりの必然性があったことが示唆されるのである。これは、表面的には、エーメール自身に憎まれるような性質があったことを提示することなのだが、そのような外的な辻褄あわせは重要ではない。多くの読者がエーメールを弁護していることから明らかのように、「僕」が提示するエーメールとの関係は「僕」の側の認識に瑕疵が求められ、読者からは肯定的に受け止められないことも多い。重要なのは、自分がエーメールを「にくんでいた」と位置付けることで、「客」が少年のころの自分とエーメールとの関係を可視化し、自らの犯した行為を整合させようとしている点である。エーメールを「にくんでいた」という意味づけは、「客=この物語を語っている大人の僕」にとってこそ必要だったのであり、そう読むことでエーメールに囚われ続けている「客」の内面が批評の対象として浮かび上がることになる。

「にくんでいた」という語りを信頼するとしても、「僕」が語るようにその心情が10歳の「僕」のものであるとは限らない。「にくしみ」という語りに誰の認識が織り込まれているかととらえるかは、読み手にゆだねられている。

### 3.4 「僕」はエーメールをにくんでいないという読みの可能性

前項では、語られたこと（10歳の「僕」がエーメールを「にくんでいた」こと）を信頼せず、その言表が語られた時点での語り手「客」の認識としてとらえる読みの可能性を検討した。このとき、いったん大人の「客」がエーメールを「にくんでいた」ことは信頼して受け入れたのだが、語りを疑うのであれば、「彼をにくんでいた」という「僕」の言葉自体を疑うことも可能であろう。「僕」の語るとおりに少年のころの「僕」がエーメールを「にくんでいた」と信じる根拠はないのと同様、少年のころの「僕」とエーメールは実際には親密だったという解釈を否定する理由はないのである。とはいえ、エーメールに対する認識の起点となっている語りの言葉を疑う

ことは、このテキストにおけるエーミールと「僕」との関係自体を読み変えることとなり、恣意的な解釈に陥ってしまう可能性もある。問題は、このような解釈が他の叙述との整合性を保てるかという点である。いささか深読みになるが、このような読みについて検討してみたい。

まず、12歳の「僕」とエーミールとの関係が読み取れる。「僕」とエーミールの言動を挙げてみる。これらの語りは「僕」の内面を語る言葉を含んでおり、語られている叙述自体の信頼度を問うこともできるが、ここでは読者が真と受け取っていると考える。

エーミールがこの不思議なちょうをもっているということを聞くと、僕は、すっかり興奮してしまって、それが見られるときの来るのが待ち切れなくなった。食後、外出できるようになると、すぐ僕は、中庭を越えて、隣の家の上階へ上がっていった。

せめて例のちょうを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手を取った。

彼は出てきて、すぐに、だれかがクジャクヤママユをだいなしにしまった、悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのかわからない、と語った。僕は、そのちょうを見せてくれ、と頼んだ。二人は上へ上へ上がっていった。

「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日はまた、君がちょうをどんなに取りあつかっているか、ということを見るのができたさ。」

(下線は筆者による)

「僕」はエーミールがクジャクヤママユを持っていると聞くところから「すぐ」彼の家を訪ねようと思えば、エーミールは「僕」が訪ねてくると「すぐに」クジャクヤママユが台なしにされたことを告げている。また、「僕」はエーミールの部屋に入ると「すぐに」エーミールが収集をしまっている箱を手を取っているのだから、エーミールがどこに収集をしまっているのか知っていたと推測できる。さらに、「僕」はコムラサキを見せた後「二度と彼に獲物を見せなかった」と述べていたが、エーミールは「僕」の収集を「君の集めたやつはもう知っている」と言う。したがって、エーミールは「僕」の収集を見てはいないが、話は聞いていたと考えることができよう。これらの言動とそれに関わる記述は、二人の間にはある程度以上の往来があったことを示しているように見える。少なくとも「僕」から見て「にくしみ」という感情で括られる心的距離を感じている相手に対して、こうした対応はいくらか不自然ではないだろうか。くり返される「すぐに」という語りからは、二人の間には相手の意向や意図を斟酌しないでよい程度の近さを読み取ることもできるだろう。

また、エーミールに自分の行為を告白することをためらう「僕」は、その理由として次のような感情を語っている。

あの模範少年ではなくて、ほかの友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。彼が、僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようもしないだろうということを、僕は前もってはっきり感じていた。

この語りで示される、エーミールには決して理解されないだろうという認識は、エーミールの異質さについての「僕」の認識であると解釈されている。しかし、「客」はなぜこれほどエーミールの内面がわかるかのように語れたのか。エーミールに受け入れられないことが「僕」のためらいの原因であるとしたら、それはエーミールに対する「僕」の近しさの裏返しであると考えられる。

このような読みと先の距離感を合わせて考えれば、少年のころの「僕」とエーミールは親友だったという読みも成り立ちうる。「少年の日の思い出」は、エーミールというこの上ない友＝「宝」を「僕」が失った物語なのである。エーミールを深く理解していたからこそ、「僕」はエーミールが自分の言葉を理解しないとわかっていて、そのような読みのもとでは、憎しみは、友を失った痛みを糊塗するために捏造された記憶であると解釈されることになる。

エーメールに対する「僕」の語りが過度に攻撃的であることはこれまでも指摘されており、エーメールに対する「僕」の評価は信頼できない語りとして位置付けられてきた。一方、丹藤（2012）が指摘するように、なぜ「僕」の語りがエーメールに攻撃的にならざるをえなかったを考えることは、「僕」の語りを考えるときには重要な観点となる。「彼をにくんでいた」という語られた内容自体を疑うことは、こうした語り自体を問い直す際の視座の一つになる。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、エーメールへの思いを語る「客」の語りに焦点化して、「にくんでいた」という「客」の語りを疑い、「僕」とエーメールとの関係を読み直す解釈の可能性について検討した。その手順として、語り手が自身の内面を語る言葉を信頼することをいったん保留し、語りの言葉に誰の認識が投影されているのか、語られた認識と人物の言動とは整合するかに着目することで、語られた言葉の妥当性を検証した。その結果、エーメールをにくんでいたと意味づけることは大人になった「客」にとってこそ必要だったという読みの可能性や、少年の「僕」とエーメールは親密だったという読みの可能性がありえることを指摘した。

ただし、筆者は、このような解釈が、「少年の日の思い出」の読みとして望ましいと考えているわけではない。「僕」とエーメールとの関係を前景化して読むことで、「僕」の犯した罪や、「僕」のちょうに対する思いをどうとらえるかという問い、「僕」とエーメールとの断絶がとらえにくくなってしまふからである。先行研究が蓄積し、くり返し教室で話題にされてきたこれらの課題を素通りしてしまうのであれば、「少年の日の思い出」の読みとしては浅いものにとどまると言ってよいだろう。一方で、エーメールへのにくしみを語る言葉の責任が「客」に帰せられる以上、「にくしみ」がだれの認識であるかとらえるかは、教材分析においては、解釈の分岐点として想定しておくべき観点である。語りへの信頼度に応じた読みの可能性を予想しておくことは、教材分析においては必要であろう。

このように語られた内容を疑ってみることは、語りへの信頼度を変えて読み直してみることは、語り手はなぜそう語ったかを問い直し、語りを批評する際の視点の一つになる。「本当に『僕』はエーメールをにくんでいたのか」という問いは、読者の読みをつくるためではなく、一度作りあげられた読みを問い直すために有効な問いかけだと考える。そうすることで、学習者の読みを揺さぶる可能性が生じてくるからである。

「少年の日の思い出」には、その真偽を疑って見ることが可能な語りは他にもある。たとえば、エーメールへの憎しみと呼応するかのように語られるちょうへの「熱情」も、大人になった「客」の言葉でしか示されない。ちょうへの「熱情」はだれの心情なのか、「僕」の内面をそのように語るこの意味は何かを問うことが、「僕」や「客」を相対化することにもなる。今後の課題としたい。

#### 【謝 辞】

本稿は、第125回全国大学国語教育学会における口頭発表「物語テキストにおける語りの信頼度に関する一考察」に基づいて執筆したものである。会場において意見をいただいた諸氏に感謝を申し上げます。

#### 【引用参考文献】

- 佐々木秀穂（2013）再論「少年の日の思い出」－聞き、語ることへの勇気を育てる文学教育(2)－、『第124回全国大学国語教育学会発表要旨集』、全国大学国語教育学会
- 須貝千里（2012）「語り手」という学習用語の登場－定番教材「少年の日の思い出」（ヘルマン・ヘッセ）にて－、『日本文学』、2012年8月号、日本文学協会
- 菅原稔（1987）中学校一年 少年の日の思い出（ヘルマン・ヘッセ）、『作品別 文学教育実践史事典第2集 中学校・高等学校編』、明治図書
- 竹内常一（2001）罪は許されないのか、『文学の力×教材の力 中学校編一年』、教育出版
- 丹藤博文（2011）語ること／語らぬこと－教材『少年の日の思い出』の読み－、『国語国文学報』、69、愛知教育大学国語国文学研究室
- 丹藤博文（2013）『少年の日の思い出』再論－須貝千里氏の批判を受けて－、『国語国文学報』、71、愛知教育



大学国語国文学研究室

千田洋幸（2004）欲望と他者：「少年の日の思い出」への視点、『学芸国語国文学』，36，東京学芸大学

浜本純逸（1983）中学校 少年の日の思い出（ヘッセ），『作品別 文学教育実践史事典』，明治図書

松本修（2005）「少年の日の思い出」における語りの構造，『Groupe Bricolage 紀要』，No.23

三浦和尚（2010）「少年の日の思い出」（ヘッセ）の授業実践史，『文学の授業づくりハンドブック4 中・高等学校編』，溪水社

（鳴門教育大学 言語系コース（国語））

# **A Viewpoint to the Text Analysis for Criticizing the Narrator in the Story Text**

— For “Interpretation to Doubt the Narrative” —

IKUTA Shinji

This paper examines the validity of an interpretation to doubt the narrative as one of the viewpoints for criticizing the narrator in the story text. As an example, I will consider the possibility of interpretation to doubt the narrative, that was hated Emil in ‘Shounen-no hi-no omoide’ (‘Jugendgedenken’) Therefore, I suspended trusting the narrative about the feeling of a narrator, and pay attention to recognition projected on narration or compatibility of the told recognition and the speech and conduct of characters, so verified the validity of the expressed feeling. As a result, the following interpretations were completed: it; to think that “guest” had hated Emil was required just for him who grew up, or “I” of boyhood and Emil were on intimate terms with each other. It is required in the text analysis to the story text to expect such an interpretation according to the reliability through which it tells and passes.